

教への庭から

小泉八雲の怪談「耳なし芳一」で主人公の芳一は、

般若心経(以下、心経と略)を体中に書いてもらい、悪霊から身を守ることができました。これは心経の霊的な効能だと思えます。心経には、この他に精神的安定をもたらす力があることを体験しました。

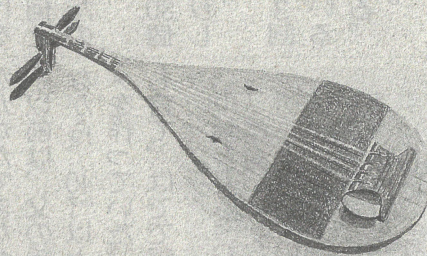
20代の中頃、「何のために生きてゆくのか」という問いに答えが見いだせず、生きて行くことがつらくなった時期がありました。そんな時に、一畑寺での禅の研修会に参加し、坐禅中に不思議な体験をしました。それは、自分の体の周りに心経が書いてあって、それが私を守ってくれているような感覚になったのです。そして、研修会からわが家の仁照寺に帰り、参道から本堂を見ると本堂が輝いて

般若心経の不思議な力

出雲市斐川町・仁照寺住職 江角 弘道

見えました。これは、何かあると思って、本堂で心経を誦経すると、心に安心感が湧いてきて「これで生きて行くことができる」と感じ、精神的安定感を得ました。目に見えない自分以外

います。通常、読まれている心経は、玄奘三蔵が漢訳した小品般若心経です。何度も読んで、その漢文の意味が難しく分かりません。今まで、お経の意味など考え



挿絵 平尾恵郷

の何か大きな力、それは心経を読むことで得られる力が、自分を支えていると思いが、心をつとめて、繰り返し、その功徳を、今日まで生活を続けてきたのでした。

ところで、心経を唱え続けることにより、願いを叶えた歴史上の人物がいまいます。盲目の塙保己一(1746-1821年)は、33歳の時に「群書類従」編纂を決意し、その成功を祈願して「般若心経を百万巻誦する」という誓願を立てました。そして、毎日100回以上般若心経を唱え続けました。1回約80秒かかるため、毎日2時間以上を誦経に費やしたとされま

す。43年間で198万回以上誦経したことが確認されています。当然、本人の努力もあつたと思いますが、私は、心経誦経によつて、大事業を成功させることができたのではと考えています。

心経の終盤では、何かおどろおどろしいような呪という語が出てきます。「呪」とはサンスクリット語の「マントラ」の訳語です。マントラは「真言(仏の知恵を表す真実の言葉)」と訳されています。例えば、

薬師如来の真言は「オン・コロコロ・センタリ・マトウギ・ソワカ」であり、真言を繰り返し唱え続けると、病氣平癒、心身安定、延命などの功徳があると信じられています。

心経の結論の部分を訳すと、「般若波羅密多(知恵の完成の実践行)は、『大神呪』すなわち『真言』であり、大いなる光の『真言』であり、はかりしれない霊験あらたかな『真言』である」とあります。

その真言は、羯諦 羯諦 波羅羯諦 波羅僧羯諦 菩提薩婆訶(ギャティ・ギャティ・ハラギャティ・ボジソワカ)です。この真言だけでももちろんいいのですが、単独で唱えるよりは心経全体を繰り返し唱え続ける方が、効能が大きいように私自身は感じています。自分を遥かに超えた大自然の力によつて自分が生かされていることを日々実感しています。